

## 北信がんプロ金沢医科大学市民公開講座

「免疫チェックポイント阻害薬：ノーベル賞を受けた治療への正しい理解のために」

日時：令和元年 10 月 5 日（土） 15：00-17：00

場所：ホテル金沢 4 階 エメラルドルーム

ちょうど 1 年前にノーベル賞を受賞した「免疫チェックポイント阻害薬」はさまざまな診療科で使われるようになった。そこで昨年度北陸がんプロから新たにスタートした北信がんプロの令和元年度本学主催市民公開講座では、消化器と呼吸器の分野における同薬剤関連の講演会を企画した。元雄良治教授（腫瘍内科学）の開会の挨拶のあと、司会は第 1 部を安本和生特任教授（同）、第 2 部を元雄教授が務めた。

第 1 部では九州大学大学院医学研究院社会環境医学講座連携社会医学分野教授の馬場英司先生が「消化器がんに対する免疫療法の最前線」と題して講演された。

「がんとはなにか」、「免疫のしくみ」、「がんに対する免疫系の働き」などの基本から順次説明され、本論の「新しいがん免疫療法である免疫チェックポイント阻害療法」に入られた。ノーベル賞を受賞した研究内容を基盤に、具体的には治療抵抗性胃がんに対する抗 PD-1 抗体薬ニボルマブの有効性から、現在胃癌治療ガイドラインでは 3 次治療として確立していることを述べられた。また大腸癌ではミスマッチ修復機能欠損型では同じく抗 PD-1 抗体であるペムブロリズマブが保険適応であること、免疫関連副作用は全身の諸臓器に発生し得るので、九州大学病院内に適正使用委員会を設置して対応されている現状を解説して頂いた。

第 2 部では千葉大学大学院医学研究院臨床腫瘍学教授の滝口裕一先生が「免疫チェックポイント阻害薬で大きく変わった肺がんの治療」と題して講演された。最初ががん薬物療法は進歩しているが、分子標的薬との比較から、免疫チェックポイント阻害薬の長所として、有効例では有効期間が長く、完全治癒する例もあること、多くの場合、副作用が少ないこと、短所として、長期有効例は全体の 20-30%に過ぎないこと、頻度は少ないが重篤な免疫関連副作用があり、死亡例も報告されていること、薬価が高いことなどを挙げられた。今後の期待として薬剤運搬システムの工夫により、がん細胞特異性が高まること、また、がん治療の目的に合わせた緩和ケアの必要性、とくに肺癌の場合、禁煙も含めた対策で 7 割が予防可能であると結ばれた。

（金沢医科大学腫瘍内科学 元雄良治記）

